

モン州にできた新しい学校の完成記念式典に出席した河村さん



給水のパイロット事業で整備された公共水栓。子どもたちが遠くまで水くみに行く必要もなくなった

も一つ、河村さんが心掛けていたことが、地元住民との密なコミュニケーション。これも、県職員時代の経験から学んだことだ。「県では道路や河川改修のために住民と用地交渉を行う機会が多く、中には20回以上交渉してようやく土地の買収に納得してくれた人もいました。住民のニーズを把握し、しっかりと

説明責任を果たして信頼してもらうことが大切だと感じたのです」と河村さんは話す。住民とのコミュニケーションを重視する理由はそれだけではない。「地域のことを一番よく知っているのは住民です。例えば学校の建設場所を調査する際、調査時点では地盤の状態などが最適でも、実は雨期になると浸水が激しく、場所を再考する必要が出てくるかもしれない。また、援助側の一方的な考えを押し付けると、地元で恩恵が届かない結果になることも。そうしたことを避けるためにも、長年そこで暮らしてきた住民の意見を取り入れられるように、今の会社が創業以来実践してきた「参加型開発」を重視しました」



さまざまなプロジェクトを任せ、世界各国を飛び回っている河村さん。イラン・ゲシュム島では持続可能な開発計画の策定に関わり、コミュニティ開発に関するワークショップを実施した

職員に。そこで10年間、主に公共事業のマネジメントに携わりながら、計画・調査・設計・施工といった工程管理の能力などが身に付いたところ、国際協力業界への転職を決意した。「履歴書を送っても、海外業務の経験がないからと門前払いになった企業もありました。多様な経歴を持つ社員が働く

開発計画の作成から、橋や道路などのインフラ整備、農村地域の開発まで、あらゆる領域の国際協力プロジェクトに対して効果的な解決策を提案する開発コンサルタント。高い専門性が求められるこの業界に5年前に飛び込んだのは、県職員から転身した河村陽二さんだ。県の公共事業を担当していた経験を生かして、人、スケジュール、予算などの面からプロジェクトの全体を管理し、最適な方向へと導く大切な役割を担っている。

事業の全体を見渡せる 「ジエネラリスト」を目指す

員時代に年間30件以上の公共事業を管理していた経験が役立ったという。「パイロット事業では、相手政府と方向性を協議したり、現場の工程を管理したりとさまざまな業務を行います。建設業者の入札に必要な書類など細かい違いはありますが、一連の流れとしては日本の公共事業と大きな差はありませんでした」

説明責任を果たして信頼してもらうことが大切だと感じたのです」と河村さんは話す。住民とのコミュニケーションを重視する理由はそれだけではない。「地域のことを一番よく知っているのは住民です。例えば学校の建設場所を調査する際、調査時点では地盤の状態などが最適でも、実は雨期になると浸水が激しく、場所を再考する必要が出てくるかもしれない。また、援助側の一方的な考えを押し付けると、地元で恩恵が届かない結果になることも。そうしたことを避けるためにも、長年そこで暮らしてきた住民の意見を取り入れられるように、今の会社が創業以来実践してきた「参加型開発」を重視しました」



事業の地盤を固める屋台骨

開発計画の作成から、橋や道路などのインフラ整備、農村地域の開発まで、あらゆる領域の国際協力プロジェクトに対して効果的な解決策を提案する開発コンサルタント。高い専門性が求められるこの業界に5年前に飛び込んだのは、県職員から転身した河村陽二さんだ。県の公共事業を担当していた経験を生かして、人、スケジュール、予算などの面からプロジェクトの全体を管理し、最適な方向へと導く大切な役割を担っている。

現場での草の根レベルの支援から国の政策レベルまで、幅広い業務に携われることがこの仕事の魅力です



コミュニティセンターの建設現場(カレン州)。河村さんは、県職員時代に公共事業を管理していた経験を生かして、設計内容の打ち合わせや工程管理にも携わった

「今の仕事に転職する前は、国際協力はおろか、海外業務の経験は一切ありませんでした。この業界では異質なキャリアだと思えることができるので、むしろポジティブに捉えています」。こう語るのは、ミャンマー南東部の地域総合開発計画の策定プロジェクトに開発コンサルタントとして携わっていた河村陽二さんだ。河村さんが初めて立ち上げの段階から関わったこのプロジェクトは、昨年10月、約4年間の取り組みを経て終了した。「大変でしたが、そこまで大きな苦労を感じずに実施できたのは、県職員としての経験があったからだと思います」

2013年に開発コンサルタント・ینگ企業の株式会社レックス・インターナショナルに入社した河村さん。国際協力に関心を抱いたきっかけは、大学時代のバックパッカーの旅だ。「マレーシアでストリートチルドレンや物乞いをする子どもの姿を目の当たりにし、日本とかけ離れた光景に衝撃を受けました。もともと子どもが好きなのもあり、開発途上国の子どもたちのために活動したいと考えるようにになりました」

しかし、大学卒業後すぐに国際協力業界で働くことはせず、大学で専攻していた土木工学を生かせる「まちづくり」に関わりたいたいと考え、静岡県庁の土木

開発コンサルタント

株式会社レックス・インターナショナル コンサルタント事業部

河村 陽二さん

●プロフィール

2003年から10年間、静岡県の職員として勤務。13年にレックス・インターナショナルに入社し、14年からミャンマー「少数民族のための南東部地域総合開発計画プロジェクト」の担当を務める。